

生命を見つめる 本田一弘

昨年二月に急逝した小高賢の遺歌集『秋の茱萸坂』（砂子屋書房）が、第二十回寺山修司短歌賞を受賞した。故人に贈られるのは初めてのことであり、選考委員の見識を高く評価したい。

小高賢といえば、齒に衣着せぬ鋭い語り口から生み出される文章が独特で、どちらかという論がとりあげられることが多い。たように思うが、改めて歌集を読みかえしてみるといい歌が多い。・枝先のつばみの五、六 陽の温みためこむように身を寄せ合いぬ

・咲くときは一緒になどと息ひそめ待っているらしさくらの姉妹
二首とも桜がまだ咲かない蕾の状態をうたった歌だが、一首目はその桜が身を寄せ合っていると感じとるまなざしがやさしく、そしてあたたかい。二首目は「姉妹」がいい。「兄弟」ではだめだ。何かゴツゴツとしてしまう。桜のやわらかい感じがよく出ている。小高は桜に「人間」を見ているのだ。擬人法といつたテクニクの問題ではないと思う。事物に対する姿勢というかが、生命、そして言葉に対する姿勢がごとごとく「人間的」なのである。角川「短歌」二〇一四年九月号の連載「馬場あき子自伝 表里との格闘」で「人間が消えてしまった文学はもう文学ではないと思う」と馬場が語っていたが、小高の歌には小高賢という人間が紛れもなくびつたりと張りついている。

・生命の速度ことなるひぐらしと黒き木肌をはさみむきあう

「生命」は人間だけのものではない。「ひぐらし」も人間と等しくかけがえない「生命」を持つという認識が根底にある。

・湯上りにつまめば足の親指がごころ触れてくれぬとどばやく

これはユーモラスな歌だ。自分の体だからといってすみずみまで分かっているかというところでもない。自らの人間としての身体を発見した驚きと慈しみが表現されている歌として読んだ。

・パソコンの機嫌うかがい三時間なでて叩いてほとほと嫌な子
小高の「生命」に対する認識は、桜やひぐらしや人間の指やといった有機物だけに注がれない。パソコンのような無機物にもかろやかに愛情が寄せられる。

・わらべ歌くちずさみつつ編み物にいそしむ母の逝くまえの指
・ショートケーキ慰問袋のようにもち「ご無沙汰」と子が居間に入り来る

・『ぐりとぐら』読み聞かせたる追懐のなかに泳ぎぬ妻はしばらく母、子、そして妻を歌った家族の歌がいい。三首目の『ぐりとぐら』は子供向けの絵本。子育てをしていた頃を懐かしむ妻をあたたかいまなざしで見つめている夫。夫もまた妻とともに「追懐のなか」に泳いでいるのだらう。長年連れ添い、子育てを終えた夫婦の穏やかな時間がたゆたうように歌われている秀歌である。

生身の小高賢はもうこの世には無いのかもしれないが、歌の中で確実に生きています。五月二十九日に行われる授賞式には、小高賢に代わって妻の鷲尾三枝子さんが出席すると思います。妻が代わりに受賞する姿を照れながら笑って見つめる小高賢の顔と大きな背中とが目に見えるようだ。